

地域子育て支援拠点研修事業<札幌開催>

<開催概要>

- ◆開催日:平成23年10月15日(土)9:50~16:30
- ◆会場:北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟(W棟) (札幌市北区北11条西7丁目)
- ◆主催:財団法人こども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- ◆後援:厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・北海道・札幌市・
北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター
- ◆協力:NPO法人子育て応援かざぐるま
- ◆参加者:184名(行政70名・NPO/任意団体67名・その他団体/企業45名・その他2名)

<プログラム>

- ◆開会・主催者挨拶 岡林一枝さん 財団法人こども未来財団 研修調査部研修事業課

◆プログラム1 基調報告 『地域子育て支援拠点事業の概要と展望』

[講師] 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室 巢瀬博臣さん

地域子育て支援拠点事業が実施された背景や、意義、箇所数の推移や目標値が説明された後、孤立する子育ての一例として母親の意識調査を紹介し、「社会全体が妊娠や子育てに無関心・冷たい」、「社会から隔離され、自分が孤立しているように感じる」といった内容が高い比率となっていることが示されました。また、幼児が一緒に遊ぶ



相手を調査した 2005 年と 1995 年の比較研究では、母親と遊ぶと答えた数がそれぞれ約 80%と約 55%となっており、子ども同士での遊びより母親の割合が大幅に増加し、母子密着が進行している現状について浮き彫りにされました。事業内容については、「ひろば機能の拡充」や「出張ひろば」の活用、「子育て支援交付金」等の新たな補助金に関する説明が行われ、子育て支援に対するニーズの高まりに対応した制度づくりの進展状況が示されました。「子ども・子育てビジョン」においては、目指すべき社会への政策 4 本柱の一つである<多様なネットワークで子育て力のある地域社会へ>の中で「地域子育て支援拠点の設置促進」が明記されている点が示されました。また、「子ども・子育て新システム」の基本的な考え方は、子ども・子育て家庭を社会全体で支援すること、すべての子どもへの良質な成育環境を保障し、特別の支援が必要な子どもを含め、すべての子どもの健やかな育ちを実現し、質の高い学校教育・保育の保障、地域の子育て支援の充実が目指されていることが示されました。

◆プログラム2 ミニ講演&シンポジウム

◇ミニ講演 『地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」について』

[講師] 渡辺颯一郎さん 日本福祉大学社会福祉学部 教授

まず、地域子育て支援拠点事業の指標「ガイドライン」が目指すものについて「多様性や個性が必要であると共に幹の部分の重要性が指摘され、ミニマムスタンダードを目指してやってきたこと、地域にあった支援拠点のあり方というのはそれぞれ工夫していただいて構わないが、拠点事業という幹だけははずさないようにガイドラインを作成したことが話されました。



次に、子育て支援拠点事業が必要になってきた背景や4つの基本事業の確認が行われました。また、児童虐待の対応件数の増加と「犯罪統計書」を比較検討し、虐待の理解が進み、通告をする人が増えているという見方もできることが指摘されました。さらに、「少子化白書」からは、日本の子どもたちが諸外国と比べ、自己肯定観が大変低い問題についての解説も行われました。子育て知識に関する世代間の受け渡しがうまくできない社会となっており、子育て世代同士の横のつながりもない中での子育てを余儀なくされている現状が語られました。「支援センターほど安心できる場所はないのです。子どもを走らせてもいいし、お母さん同士ほっとしながらお話しをしてもいい一息つける場なのです。しかし、危ないからお子さんから目を離さないで！と言われると、ここでも気を張り詰めていなければならないんだとなってしまいます。一見、休んでいるように見えるお母さんたちであっても、センター以外での生活状況を把握していかなければ、親のしんどさは見えてこないかもしれません」と語られました。

◇シンポジウム 『みんなで学んでひろげよう！札幌市の地域子育て支援拠点事業～親子がいつでも気軽に集えるひろばを身近な地域につくるために』

[コーディネーター] 渡辺頭一郎さん 日本福祉大学社会福祉学部 教授

[シンポジスト] 高木正行さん 札幌市子ども未来局子育て支援部子育て支援課 課長

山田智子さん NPO 法人子育て応援かざぐるま 代表理事

坂本純子さん NPO 法人新座子育てネットワーク 代表理事

●高木さん

札幌市における子育て支援の取り組みについての報告が行われました。「平成16年に新しい組織として『子ども未来局』が新設され、同時に『さっぽろ子ども未来プラン』を策定しました。未来プランの基本目標である『すべての家庭の子育てを支援する仕組みづくり』を進めるものとして、現在、小学校区204か所中、



190か所で子育てサロンを設置しています。札幌市では、今年度から全中学校区で常設サロンを設置すべく取り組んでいます。市内の常設サロン整備としては、「札幌市子育て支援総合センター」をはじめ、10区中6区に設置している「ちあふる（区保育子育て支援センター）」、4か所の公立保育園で行っている「地域子育て支援センター」に加え、今年度から地域でサロンを実践している団体等を指定し、拠点型子育てサロンを開設することになりました。来年度以降も順次、すべての中学校区（97校区）への常設サロンの整備を進めていきます。子どもの笑顔が輝き、笑い声が響き、子どもを安心して産み育てることができる明るい札幌の未来を切り開いて行きたいと考えております。」

●山田さん

1990年代後半、訪問保育で出会った子育てに不安感や閉塞感を抱える母親にどう対応したらいいのか分からない状況の中、親子の背後にある社会の変化に気づき、かざぐるまをNPO法人化するとともに、訪問して行う直接的な支援や子育て講座と並行して、10年前から市内各地で、地域で孤立する親子が仲間と出会う子育てひろばづくりを行っています。2009年に中央区円山地区で独自に開設した『子育て拠点てんてん』は、今年10月から札幌市地域子育て支援拠点事業（ひろば型）となりました。『てんてん』では、誰もが居心地のよい雰囲気づくり、指導ではない対等な関係づくり、人と人とのつながりや支え合いを生み出すような関わりを心がけています。預かり保育も行っています。札幌市の子育て支援事業では初めての協働の取組みなので、その責任をしっかりと受け止めつつ、今後は札幌市との協働をさらに進め、ひろばにおける預かり保育の意義も伝えていけたらと思っています」

●坂本さん

ミニ子育て支援センター「セサミ」の開設から現在までの取り組みが紹介されました。最初は児童センターの中でもとても小さい部屋から始まりました。そんなこともあってゴマ粒のような小さなという意味を込め「セサミ」と名付けました。セサミがスタートすると乳幼児親子がたくさん来るようになりました。その後、児童センターの指定管理者となり全館を使って事業を行うことになりました。児童センターに親である大人が訪れるようになったことは職員にとってもとても良い学びとなりました。目の前に畑があり、収穫させていただいたりもしています。広さがあり外遊びができるということでお父さんが来やすい環境でもあります。外で流しそうめんを企画するなどしてお父さんを引き込む工夫をしています。子どもが小学校に入っても児童センターには来られますから、長い時間軸で子どもをみられるというのがとても魅力になっています。

うちの子 よその子 みんなの子～地域の子もすべてを自分の子どものように接していきましょう、ということを経験してきました。その中には特別なニーズをもった子どももいます。障害のある0, 1, 2, 3歳のお子さんをどう受け止め支援していくのか。乳幼児が対象のセサミだけだと先が見えにくいわけですが、去年から0歳から18歳まで利用する施設を担うことになり、変化してきました。障害を持つお子さんを育てているお母さんの中で乳幼児期の子育てが終わった方を招いて、先が見えなく不安に思っている親にお話しをしてもらおうといった形で展開してきています。児童館だからこそできるということがたくさんありそうです。子どもも親も地域も巻き込んでいろんな実践ができるのです。そして何よりも大切なのは、施設を支える人の意識といえそうです」

◆プログラム3 分科会

◇第1分科会 『協働を学ぼう！～地域子育て支援拠点事業のシステムとプロセス』

[講師] 河西邦人さん 札幌学院大学 教授

[コーディネーター] 坂本純子さん NPO 法人新座子育てネットワーク 代表理事

[事例報告] 山田智子さん NPO 法人子育て応援かざぐるま 代表理事

原 美紀さん NPO 法人びーのびーの事務局長・港北区地域子育て支援拠点「どろっぷ」施設長

●山田さん事例報告

「子育て拠点てんてん」が札幌市の子育て支援拠点事業となるまでを話していただきました。まず大学との協働の子育てサロンを開始し、協働の必要性を認識していなかった市の行政と接点をつくり、「質のいい実践を続ければ道は拓ける」と粘り強く働きかけを続けました。子育ての現場からの必要性と財政的には持ち出しの現状を市長に直接伝える機会をもった後に事業が認められ、今後の増設に向けたモデルになるよう「お互いに育ち合う」という意識で進めていきたいと報告いただきました。

●原さん事例報告

「地域子育て支援拠点どろっぷ」の実践を通して協働に際して考えるべきポイントを明らかにしていただきました。行政との契約は「委託契約書」が交わされますが、「市民発の事業」という確認のためにも「協働協定書」「役割分担表」を締結することの重要性が取り上げられました。公共サービスの担い手として市民・利用者に対して還元する責任があると同時に、行政側との関係では書類作成のプロセス自体が互いを確認するためのツールとなります。協働を実践で進めるための研究を行い、行政へ提言も行ってきました。活動を言語化する作業は、自分たちを守る一方で活動自体が問われます。仕組みをつくり、新しい事業を社会の枠組みの中にはめ込み認知してもらう責任も感じているとの報告でした。

●協働に関するミニ講義 講師 河西さんより

現在それぞれの地域にあわせた“新しい公共”が求められている、それは行政だけが地域を支えるのではなく、市民のやる気・自発性から社会全体の課題を解決していく動きであり、より良い地域社会をつくるために協働が重要であるというお話がありました。協働の PDS サイクル（Plan 計画－Do 実行－See 検証）では、計画段階から市民が参加して目的を明確にすること、コミュニケーションを通してともに学び合うことの大切さ強調されました。市民側からの情報発信と横のつながりづくりも大切です。

●ディスカッション

参加者からは、自分たちがやりたいこと、守りたいこと、大事にしたいことは何か、という原点に立ち返らせてくれる機会になったという声が出ました。「役割分担表」は言葉を換えれば「マニフェスト」。新しい公共の世界では、ネットワークづくりの重要性が示唆され、行政も含めた地域の団体の共有・シェアで展望も広がるのでは、と今後へむけて提言がありました。

◇第2分科会 『スタッフに求められる役割とは？～地域子育て支援拠点の実践』

[講師] 渡辺顕一郎さん 日本福祉大学 教授

[グループファシリテーター]

小林真弓さん ねっこぼっこのいえ 代表

河野和枝さん さっぽろ子育てネットワーク 代表・北星学園大学社会福祉学部 准教授

後藤二子さん 太平こどもの家

熊澤仁美さん NPO 法人子育て応援かざぐるま 理事・子育て拠点てんてん

中谷通恵さん NPO 法人お助けネット 代表

●流れ

第2分科会は、①渡辺さんのレクチャー、②実際に支援の現場をロールプレイで再現し、演じたりその場面を見たり聞いたりすることから学ぶという2部構成でした。

●渡辺さんのレクチャー

支援者の役割については「参加者と参加者をつなぐ役割、親と子をつなぐ役割がある。拠点とは、『支え合う』拠点であり、親同士の支え合い・助け合いの拠点である」という指摘がありました。また「親同士の支え合い（ピア・サポート）の重要性」については、「『私だけではないのだ!』」ということを知ることにより、親は安心する。同じ立場にいる者だからこそ、分かち合えることもある。親同士が支え、支えられることが重要」ということも確認されました。

また、発達の視点からみた「密室育児」の問題点については、親が子どもを過剰に守ろうとする「先回り育児」（柏木恵子さんの言説）の弊害についての指摘があり、子どもの自立を「航海」に例えると、「自立に向けた船出と航海には、航海術を教える地域の多様な人々が関わるということが重要である」という確認がなされました。

●グループワーク

グループに分かれ、ロールプレイ（その1）を行いました。渡辺先生からは、「演技した時のドキドキの気持ちを忘れないで下さい。それは、拠点を訪れる参加者の気持ちでもあるのです。初めて来る人は特にドキドキで来るのです。言葉がなくても、参加している人たちは、何かメッセージやサインを発している。どんな様子なのか、心配りをしてほしい」という助言がありました。その後、ロールプレイ（その2）を行いました。支援者が一方的に拠点の説明をするのではなく、参加者の方の発する声に耳を傾け、いかにニーズを聞き出すかを確認する場となりました。

渡辺さんからは、「私たちは日常、無意識のうちに自分の得意とするタイプの人を選んで接しているかもしれない。その部分については自覚的であってほしい」とのアドバイスがありました。実際にロールプレイをすることで、参加者の気持ちや立場を実感し、支援の原点を確認する分科会となりました。

◇第3分科会 『親も子どもスタッフもともに育つ場づくりとは？ ～地域子育て支援拠点の哲学』

[講師] 川田 学さん 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床センター 准教授

[事例報告] 柴川明子さん むくどりホーム・ふれあいの会 会長

宮川まさこさん NPO 法人子育て応援かざぐるま 理事

札幌大谷大学短期大学部子育て支援センター「んぐまーま」

●柴川さん事例報告

「むくどりホーム・ふれあいの会」は、障がいのある子もない子と一緒に遊べるバリアフリーの藤野むくどり公園造りに関わり、その完成を待つ間 1995年9月公園前の個人住宅を開放して発足しました。訪れた方には同じ目線で寄り添いながらゆるやかなかわりで温かく迎えています。「いつでも・誰でも・自由に受け入れられる実家のようなところ」、「ありのままでいられるホッとする場所」として、挨拶や自己紹介を大切に、参加者がその日の主役になれるよう、一緒に楽しみ、アットホームな環境で四季を通してバリアフリー公園を活用し、地域の人々や学校ともつながり、障がいがあってもなくてもお互いの違いを認め、共感し、理解し合い、学びの場所にもなっています。10月から札幌市のつどいの広場事業を受けて、専任スタッフを位置づけました。赤ちゃんからお年寄りまで異世代交流を通してその人の持っている力を輝かせる場として、共に育ちあうことをめざしている地域からの子育て支援の報告でした。

●宮川さん事例報告

「んぐまーま」は、2005年に札幌大谷大学短期大学部子育て支援センターつどいの広場として大学に開設しました。NPO 法人子育て応援「かざぐるま」と委託契約、協働で運営しています。地域の親子が気軽に集える場であるとともに、保育科学生の授業の一部として子育て支援の理論と実習・研究の場として教育と実践が地域に貢献し、共に育ち合うことを目的としています。特色として一人一人の気持ちを大事に、ノンプログラムでマニュアルはつくらず、お互いに居心地のよい場づくりをともに考え、「安全」「安心」「愛されている」「子どもたちがいつまでも温かく見守られている」と感じられる支援となるように、また、子どもが自ら育つ、子ども同士が育ち合う環境づくりが、親子同士で仲間と地域で主体的に子育て出来るように、そして、支え、支えられる「子育て支援の循環」が親の孤独、孤立を防ぎ、地域でつながっていけるように、活動を通して心がけています。子育ての課題を盛り込んだ「双子の会」や大人のスポットタイム「大人の遊びと学び」、「子育て相談」などの事業を通して、ボランティアや保育科学生とのかかわりなど、教育の場と地域が協働した子育て支援の実践報告でした。

●グループワーク

6～7人のグループになって「自分の現場では、どのようなく哲学>（考え方）を大切にしているか。それはどうしてか」をテーマに30分程話し合われ発表されました。

●川田さんによるまとめ

「哲学」は「ある」ものではなく「つくる」もの。それは人と人との出会いから紡ぎだされます。国連の子どもの権利委員会では、日本の大人と子どもの関係が貧困であり、応答の関係が築けていないと指摘しています。子どもに精神的な居場所がなく、否定的な自己像を育てているのです。それは大人とっても同じです。子育て支援拠点には、そこに集う人々(子ども、保護者、スタッフ)の応答的関係を育てる役割が期待されます。柴川さんが「人と人との出会いの場をつくることは素敵なこと」とおっしゃる中には出会いというものに対する深い敬意があります。宮川さんのお話から、「んぐまーま」ではマニュアルや禁止事項は決めず、みんなにとって居心地の良いところに育てていくという哲学が読み取れます。私(川田)自身が暫定的に考えていること(哲学)は、人の能力ではなく「存在感」に注目することです。その人の「存在感」は、人と人との関わりの歴史の中で、お互いに育んでいくものです。そして、人が育つためには「中間帯」が必要であるということです。中間帯とは、土間や縁側や路地のような場所、親や先生ではないナナメの関係で接することのできる他者などです。中間帯の存在が、子育ての神経質を緩め、創造的にします。最後に、「ことば」を大切にしたい。

ことばが軽く乱暴な時代です。人や子どもを表現することばを磨くこと。「こういう言い方で良いかな」、「こういう考え方で良いかな」とゆっくり試行錯誤する空間が必要です。対象領域を固定的にとらえずに(つまり、仕事の範囲を限定せず)、アンテナを張って潜在的なニーズ(個人・家庭・社会)を拾って展開させる場として、子育て支援拠点が「応答的な環境」のモデルとして育っていくことを期待しています。「子育て支援で社会が変わる」は本当だと思います。



◆プログラム4 全体会 (分科会総括・ディスカッション)

[コーディネーター] 梶井祥子さん 北海道武蔵女子短期大学 教授

[分科会報告]

第1分科会 河西邦人さん 札幌学院大学経営学部 教授

第2分科会 小林真弓さん ねっこぼっこのいえ 代表

第3分科会 川田 学さん 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床センター 准教授

●第1分科会

「①原点、②見える化、③つながり」という3つのキーワードが挙げられました。「①原点は、山田さんは当事者の立場から活動を始め、自分たちの活動をふり返り、何をすべきかミッションを再考したということ、原さんは行政と協働する際、自分たちの『こだわりは何だったのか』をふり返り、『ぶれない原点』に立ち返ったこと」が指摘されました。「②見える化は、行政と協働していく際に見える化することで、理念が共有され、情報開示されることで、より質の高い協働につながる。それは、他地域のモデルとなる」という評価がありました。「③つながりは、子育て支援の事例であれば他分野におけるネットワークの作り方も参考となり、異業種交流も重要なつながりとなる。親子のつながり、地域のつながりを創っていくことが重要である」という指摘がなされました。

●第2分科会

「スタッフに求められる役割」として、渡辺さんのレクチャーのあと、ロールプレイ2本が行われました。小林さんから「1つ目のロールプレイは、参加者の方が発している非言語のメッセージ、サインを読み取る内容、2つ目のロールプレイは、今日初めて拠点にやってきた参加者の方にどう声掛けするのかという内容であった。参加者の声に耳を傾け、いかにニーズを聞き出すのかを確認する場となった。グループワークでは、参加者の立場を演じることで、拠点に足を運ぶ際の不安感や心細さを体感する内容となった。支援者側に立つ人が、参加者の立場を本当に理解しているのかという点が分科会でのポイントになっていた。」という内容が報告されました。

●第3分科会

「地域子育て支援拠点の哲学」というテーマで、「むくどりホーム」の柴川さん、「んぐまーま」の宮川さんからの事例報告がありました。川田さんからは「むくどりホームの実践は、十数年という年月を重ねて、一つ一つのエピソードを大切に、実践に生かしている。人と人が出会うということの深い部分、人に対して『敬意』を払うことの重要性を示唆する実践である」という指摘がありました。また、「んぐまーま実践からは『子どもは遊びの中でどういう時に心の満足を得るのか』という示唆がある。ひろばの場面では、実際にはハラハラ・ドキドキする場面がたくさんあるのだが、子どもが子ども時代を不安なく、磐石に生きていけるためには、そうした不安やハラハラをスタッフが受け止めているのではないか」という指摘がありました。

●まとめ

第1分科会は協働の『プロセス』に着目し、「持続可能な子育て支援とは何か？そのための協働のあり方とは？」について理解を深めました。第2分科会では、「言葉かけ、研修の重要性」について実践的に学び合いました。第3分科会は『哲学』をキーワードに話し合いを深め、「学習の文化を作りあげること」の重要性が指摘されました。

最後に梶井さんからは、子育て支援活動の道のりを振り返るかたちで次のような総括がなされました。「地域の子育て支援の活動は、“私だけが孤独に子育てをしているのはおかしい”と気づいた母親が声をあげ、やがて多くの母親たちの共感を得ることから始まりました。地域の人々を巻き込みながら、共有する課題を相互理解と協働で解決していくという道筋を示してきました。それはまさに、今提唱されている『新しい公共』の流れを先取りした実践だったのではないのでしょうか。その意味で、私たちは歴史に参加し、この社会の方向性をけん引してきたという自負を持ってよいのだと思います。」